



総合型地域スポーツクラブ 公式メールマガジン

—平成30年度総集編—



特集

テーマ別運営事例集



公益財団法人

日本スポーツ協会

このメールマガジンはスポーツ振興くじ助成金を受けて配信しています。
スポーツ振興くじについては以下から
[日本スポーツ振興センターHP] <http://www.jpnsport.go.jp/>

スポーツくじ



スポーツ振興くじ助成事業

特集 INDEX

総合型クラブを運営していくために重要な事項について、各号ごとにテーマを設けて、該当する全国のクラブの取り組みを紹介しました。

第138号（平成30年5月21日発行）

総合型クラブの質的充実に向けて

～PDCAサイクルを回し持続可能なクラブ運営を目指そう～ ----- 2

「自己点検・評価に取り組むクラブ」

NPO法人エンジョイスportクラブ魚沼 ----- 5

NPO法人こうかサスケくらぶ ----- 10

第139号（平成30年7月20日発行）

「他団体と連携するクラブ」

NPO法人ただみコミュニティクラブ ----- 14

いきいきエンジョイ清原スポーツクラブ ----- 20

第140号（平成30年9月20日発行）

「クラブハウスを活用するクラブ」

ふれあい佐布里スポーツクラブ山 ----- 26

NPO法人ELF丸亀 ----- 32

第141号（平成30年11月20日発行）

「座談会」

第1世代・第2世代が考える総合型クラブの未来 ----- 37

第142号（平成31年1月21日発行）

「指導者育成に取り組むクラブ」

一般社団法人とまこまい・遊び塾 ----- 46

やつしろ総合型クラブ「リ・ボンズ」 ----- 51



特集

総合型クラブの質的充実に向けて ～PDCAサイクルを回し持続可能なクラブ運営を目指そう～

国が総合型地域スポーツクラブ（以下「総合型クラブ」又は「クラブ」）の育成モデル事業を推進してから約20年が経過しました。先駆的に総合型クラブの設立及び運営を担ってきた第一世代の関係者の熱意と努力及びその成果を、今後は第二世代以降の次世代に発展的に引き継いでいくことが求められています。

また、平成29年3月に策定された第2期スポーツ基本計画では、「総合型地域スポーツクラブの質的充実」に向けた具体的な施策として、PDCAサイクルにより運営の改善等を図る総合型クラブの増加が掲げられる等、総合型クラブを持続可能な「社会的な仕組み」として地域に定着させる取組が重要になっています。

1. 概要

日本スポーツ協会では、平成26年度に文部科学省から委託を受け、各種調査※1を実施した上で、クラブが継続的・安定的に活動を行うために目指すべき「指針」と、「指針」への到達に向けて取り組むべき方向性を「評価指標」として、以下のとおり取りまとめました。

指針		評価指標			
諸資源の獲得	① 活動基盤の整備	各段階		数値化	
	② 連携体制の確立	基盤	総合型クラブの創設・自立に向けて、活動基盤を整備している段階		1
組織体制の整備	③ 理念の共有				1.5
	④ 自発的（ボランティア）組織特性				
	⑤ 日常生活圏	発展	一定の活動基盤を整備し、充実した活動を行うための体制整備に向けた発展段階		2
成果の創出	⑥ 事業の多様性				2.5
	⑦ クラブライフの定着	充実	一定の充実した体制を整え、さらなる持続可能な体制整備を行っている段階		3
					3.5
		持続可能	指針に示した内容を満たし、持続可能な体制を十分整備している段階		4

第2期スポーツ基本計画では、PDCAサイクルにより運営の改善等を図る総合型クラブの増加を数値目標としております。

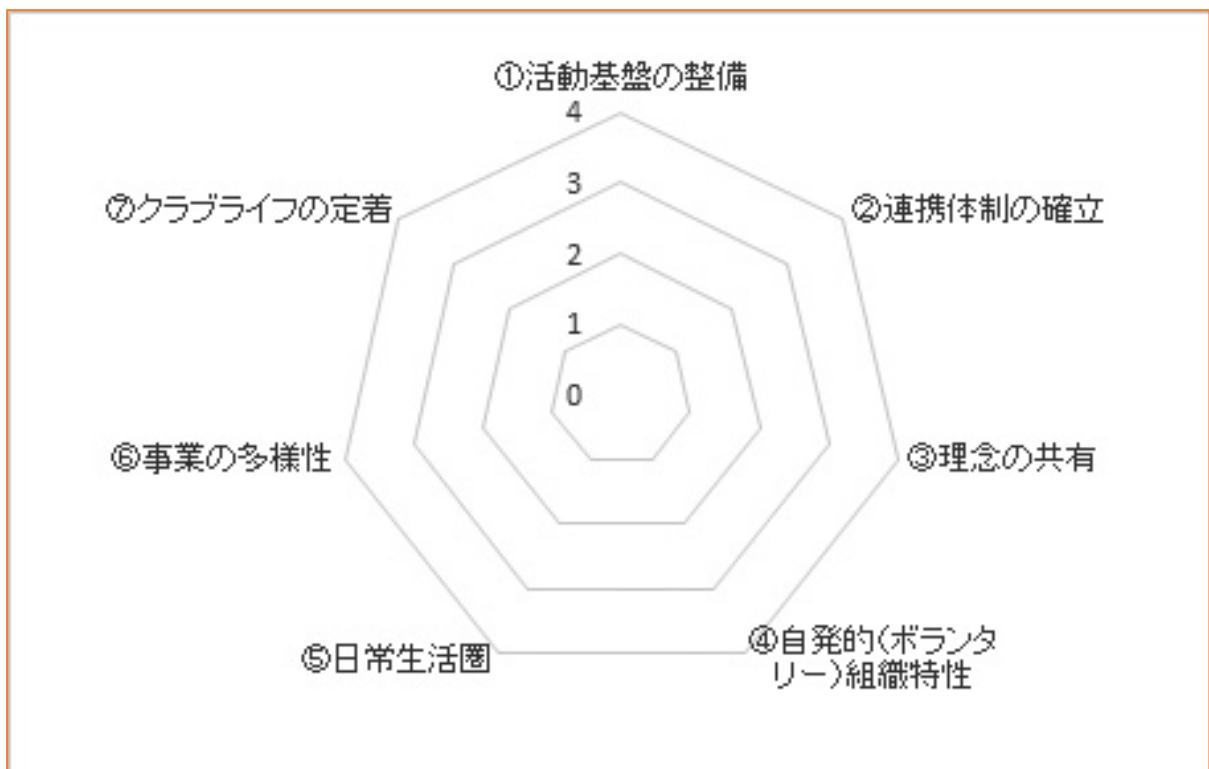
★平成27年度現在37.9%
→目標70.0%

各クラブは、これら「指針」において、クラブが現在どの段階にあるのか「評価指標」を用いて自己点検・評価することで、適切な現状把握を行うことができるとともに、持続可能なクラブ運営に向けて、次の目標（段階）を見据えた着実なステップアップが可能となります（PDCAサイクル※2）。

自己点検・評価結果は以下のとおり、レーダーチャートで可視化されますので、クラブの特徴や課題を具体的に把握することができます。

自己点検・評価は、本会ホームページに掲載しているエクセルを使用して行えます。

[こちら](#)をクリック！



2. 効果

実際に、自己点検・評価を実施したクラブからは、複数名のスタッフで実施することで、それぞれが考える「クラブの現在地」が、実は違っていたということが分かり、それを機に改めて「クラブ理念の共有」を図るきっかけとなったという感想も聞こえています。

詳しくは、自己点検・評価の取組を通じて、上記のような効果が得られているクラブの声を下記URLからご参照ください！

[NPO法人エンジョイスポーツクラブ魚沼](#)

[NPO法人こうかサスケくらぶ](#)

3. さいごに

総合型クラブは、所在している地域の人口等、置かれている環境が各クラブによって様々です。また、創設後の年数によって運営上の課題の優先順位も変わっていくことでしょう。

このため、自分のクラブの自己点検・評価結果と他のクラブの結果を比較し、自分のクラブの数値が低かったからといって、それがイコール悪い結果だと断言できるものではありません。逆に数値が高かったから良いということでもありません。

あくまでもクラブの自己点検・評価であり、クラブの現在地や成長度を把握するためのツールとして活用してください。

ぜひ自己点検・評価を定期的に行っていただき、全国のクラブが持続可能な「社会的な仕組み」として地域に定着できるための一助となればと思います。

※1: 平成26年度文部科学省委託事業【スポーツを通じた地域コミュニティ活性化促進事業】

「持続可能な総合型地域スポーツクラブを目指して」(平成27年3月: 公益財団法人日本体育協会)

※2: PDCAとは、P(Plan「計画」)・D(Do「実行」)・C(Check「検証」)・A(Action「改善」)の頭文字から名付けられた効率的な業務遂行のサイクルを表した考え方。

「総合型地域スポーツクラブ育成プラン2018」(平成30年4月1日: 公益財団法人日本スポーツ協会)

参考

■ [「持続可能な総合型地域スポーツクラブを目指して」調査報告](#)

(日本スポーツ協会 ホームページ)

■ Sports Japan 2015年7・8月号(Vol.20) 紹介記事

[「持続可能な総合型クラブの推進に向けた取組の指針と評価指標」に見る総合型クラブの将来](#)

Sport Japanのご紹介

日本スポーツ協会情報誌である「Sport Japan」は年間6回(うち2回特別増ページ号)発行し、スポーツ指導者、スポーツ少年団、総合型地域スポーツクラブをはじめとするスポーツ関係者の皆様はもとより、様々なスポーツ愛好者にとりましても有益でタイムリーな身近な情報の発信に努めています。

バックナンバーや購入のお申込みはこちらから

<http://www.japan-sports.or.jp/publish/tabid660.html?catid=33>

特集

自己点検・評価に取り組むクラブ

NPO法人エンジョイスportsクラブ魚沼 ＜新潟県魚沼市＞

自立・自律したクラブへと至るためには、クラブ理念を踏まえ、将来的な到達点を明確にした目標を設定する必要があります。そして、その達成に向けた具体的な取組計画を策定した上で、計画に基づく活動を着実に実行し、その内容及び効果を定期的に検証することによって常に改善を図っていくといったPDCAサイクルによって取り進めることが重要です。

そこで、今回は、日本スポーツ協会が2014年度に作成した「持続可能な総合型クラブの推進に向けた取組の指針と評価指標(以下「自己点検・評価」という。)」の活用方法と実際に「自己点検・評価」を活用するクラブの事例を紹介します。



1 クラブ概要

安定経営目指し設立準備に3年の歳月

平成9年に、体育指導委員事業(現スポーツ推進委員)の参加者減が月例会議で取り上げられ、個人のスポーツの価値観の変化に対応するため、総合型地域スポーツクラブの検討が始まりました。総合型クラブを正式に立ち上げる前に「子供スポーツクラブ」を平成11年に立ち上げ、その後、体育協会、スポーツ少年団、教師、公民館、地域スポーツ愛好者代表に呼びかけ、行政内に準備委員会を設置しました。クラブのあるべき姿を模索する中で、クラブ設立後にスポーツ振興くじの補助がなくなることから、安定経営のために運営資金の確保を中心に据え、設立準備に3年の年月をかけ万全を期したうえでクラブづくりを進めました。

クラブ設立後15年間、自主財源率100%を継続

平成13年、14年とスポーツ振興くじの補助金を使い、社会体育事業と介護予防事業、すでに立ち上げた子供スポーツクラブなどのプレ事業のプログラムを行政に提案し、すべて受託事業として委託を受けました。クラブ全体の収入に占める受託プログラムの割合は85%、2700万円になります。平成15年クラブ設立後、15年間自主財源率100%を続けています。クラブの理念である、「子供たちをスポーツ好きにする活動」、「医療費、介護費用の削減」、「住民のだれもが気軽にスポーツに親しめる機会の提供」、「クラブに加入した既存団体支援と指導者育成」、「スポーツを通じた、健康で明るく活力に満ちたまちづくり」を実現するための資金はすべてここから生み出されます。

指定管理受託後に経費削減・業務見直し→器具備品を行政に寄付

平成19年からはスポーツ推進委員業務がクラブへ委託され、増えすぎた委員の削減を図るため「適正人数」を設定したほか、参加者に対する受益者負担の徹底等で、クラブは妥当な受託額の獲得、行政は大幅な予算削減を実現しました。さらに平成25年から体育館の指定管理を受託し、5年間で経費削減、業務見直しで生み出した資金で購入したランニングマシン5台やアリーナ照明ほか多数の器具備品を行政に寄付しました。設立時からプログラムにほとんど変化は無く、介護予防、健康づくりを中心に全くぶれないクラブ経営を続けて16年目を迎えます。

2 健全経営実現へ内部評価制度を採用

健全経営がクラブ理念を実現していくという考え方から、内部評価制度(定員充足率やアンケート等の評価)を平成23年から取り入れています。

参加者満足度などプログラム別に評価

プログラム名	登録者数(参加者)			定員充足率			参加者満足度(%)			事業全体評価			事務局所見	事業趨勢
	前々年	前年	今年	前々年	前年	今年	前々年	前年	今年	前々年	前年	今年		
高齢者筋力向上トレーニング事業400	425	422	384	106%	106%	96%	90%	90%	90%	4.2	4.2	4.2	市の委託内容が同じため、大きな変化なし	→
健康運動教室 小出15	16.7	16.3	16	111%	109%	107%	85%	85%	84%	4	3.9	4.3	参加者が固定化 条件評価はアンケートによる	→
健康運動教室 広神20	15	12.3	19	75%	62%	95%	78%	70%	84%				参加者数が回復 条件評価はアンケートによる	→
健康運動教室 守門20	13	10	11	65%	50%	55%							公民館事業が全く同じため廃止	↙
出前健康運動教室60		49	56		109%	86%		85%	79%				小平尾・入広瀬・伊米ヶ崎・千溝で開催 全会場で好評	→

※プログラムの数字は定員数

このようにして、クラブの稼働率や参加者に対する満足度アンケート、事業条件によるトータル評価、そして事務局所見などを参考に、今後の方向性を見いだしています

経理ソフトを活用し経営分析→安全性をチェック

定員充足率や参加者に対する満足度アンケートなどの評価に加えて行っているのが、経理ソフトに備わっている経営分析機能です。プログラム別や全体の利益率、クラブの貯えの推移などの数字を基に、持続可能なクラブ運営のための安全性をチェックしています。

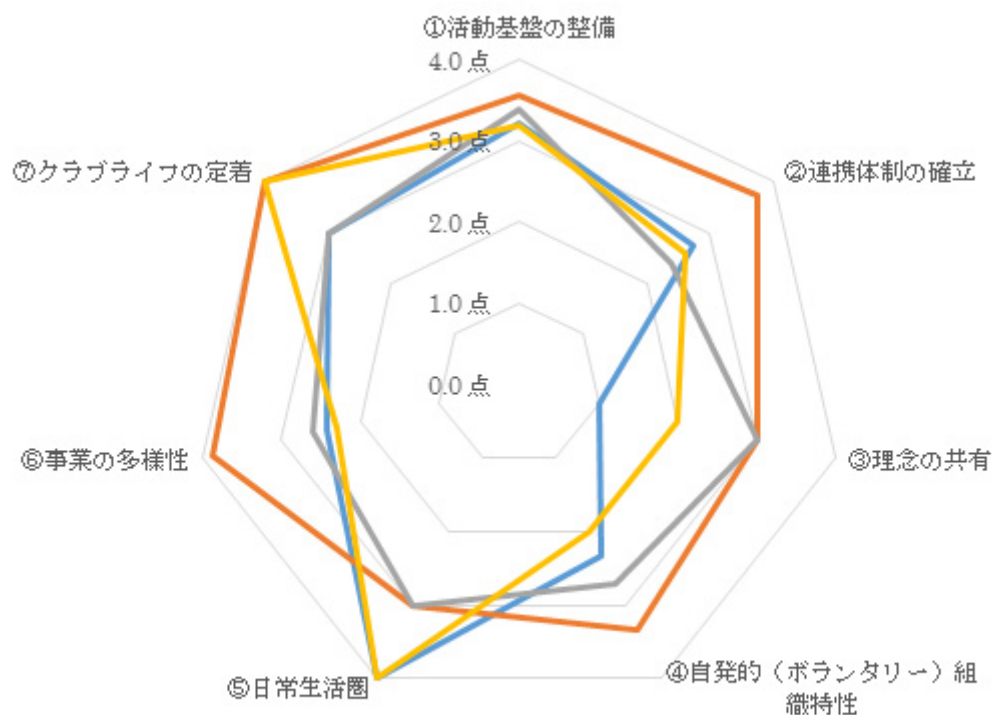
3 自己点検・評価を平成28年から導入

内部評価を補うチェックシート7項目

今まで行った内部評価で決定的に足りない部分（チェックシートの7項目）は、クラブ構成に欠かせない要素です。まさにその部分が「自己点検・評価」で取り上げられている部分であり、「①活動基盤の整備 ②連携体制の確立 ③理念の共有 ④自発的（ボランティア）組織特性 ⑤日常生活圏 ⑥事業の多様性 ⑦クラブライフの定着」の各項目でした。そこで、平成28年から年に1度この自己点検を行うこととしました。

常勤スタッフ4人がチェックシート記入

当クラブでは常勤スタッフ4名で別々にチェックシート記入し自己点検を行いました。



総合型クラブの自己点検・評価の結果（7項目）

上記の図は4人がクラブの「自己点検・評価」を行った結果を一つのグラフに落とし込んだものです。

青：アドバイザー（経験20年） 黄：マネジャー（経験13年）
グレー：サブマネジャー（経験12年） 橙：新人スタッフ（経験3年）

結果を4人全員で分析

この結果をスタッフ全員で話し合い、分析を行いました。新人スタッフを除くと、経験豊富な人はほぼ同じ捉え方をしています。新人に関しては、大きな7角形を示しています。入社以来、アドバイザーから目指すクラブの在り方を新人に説明してきたことにより、良いところが象徴的に見えているのかもしれませんが、クラブのことが、まだよく見えていないのかもしれません。

理念の共有で認識異なる

大きく結果が違ったのは、理念の共有です。経験20年の青は極端に点数が低くなっています。低くなった理由としては、スタッフにより理念の共有方法や共有実感が異なること等と考えられます。

4 身の丈にあった経営規模を継続

更なる事業の拡大は現事業に支障も

この取り組みで4人が認識したことは、決して大きな7角形の結果でなくても良いのではないかということでした。

私たちのクラブは、出来るだけ身の丈に合った経営規模でクラブの質を高めることにこだわってきました。例えば、⑥事業の多様性の面では、現時点ではこれ以上必要ないとの結論です。また、②連携体制の確立という面でも、連携先が更に増えることは今の事業に支障をきたすのではないかという判断に至りました。

複数の評価ツールを機能的に活用→クラブスタイルを見直し

様々な「自己点検・評価」の項目は、クラブを今後どのような形にしていきたいかというコンパスであり、「必要なもの、そうでないものの取捨選択」のツールだと思います。実際みんなで作業をしていく中で、私たちのクラブスタイルを見直すことができました。

クラブ理念を実現するための経営資金の確保、そして経営資源の確保。そのためのプログラム評価、経営指数評価、そしてこの「自己点検・評価」ツールをうまく組み合わせて、より個性的な持続可能クラブをつくっていきたいと思います。

NPO法人 エンジョイスポーツクラブ魚沼 アドバイザー 高木 貞介

クラブ プロフィール

設立年月日 平成15年7月6日

所在地 新潟県魚沼市堀之内130番地

運 営 会員数635名（平成29年7月現在）、予算規模3,240万円（平成29年度）

有給職員 4名

特 徴 市町村合併後を見据えて設立し、合併後、旧町村単位の5地区のサテライト化でクラブ経営の効率化と運営資金確保を実現しているクラブです。運動好きな内科医の理事長、健康運動指導士のマネジャー、スポーツ専門学校出身で各種の資格を持つサブマネジャー、簿記に明るく社会体育畑を長年経験したアドバイザー、福祉分野の学部を卒業した新人スタッフなどのプロスタッフが揃っています。そのような多様な人材をベースに、行政と良好な関係を築いているクラブです。

連絡先 〒949-7413 新潟県魚沼市堀之内130番地

電話 025-793-7166 FAX 025-793-7164

E-Mail espo@espouonuma.com

URL <http://espouonuma.com/espowp/>



高齢者介護予防教室



ウォーキング



健康づくりプログラム



ダンス教室

特集

自己点検・評価に取り組むクラブ

NPO法人こうかサスケくらぶ ＜滋賀県甲賀市＞

自立・自律したクラブへと至るためには、クラブ理念を踏まえ、将来的な到達点を明確にした目標を設定する必要があります。そして、その達成に向けた具体的な取組計画を策定した上で、計画に基づく活動を着実に実行し、その内容及び効果を定期的に検証することによって常に改善を図っていくといったPDCAサイクルによって取り進めることが重要です。

そこで、今回は、本会が2014年度に作成した「持続可能な総合型クラブの推進に向けた取組の指針と評価指標(以下「自己点検・評価」という)」の活用方法と実際に「自己点検・評価」を活用するクラブの事例を紹介します。



1 クラブ概要

私たちの地域では昭和56年の国民体育大会(びわこ国体)を機に「スポーツ都市宣言」を掲げ、地域住民のスポーツ振興に力を入れるとともに、すべての地域住民がスポーツに親しむ明るく住みよいまちづくりに努めてきました。しかしながら、総合型地域スポーツクラブ設立検討委員会で実施したアンケート調査では、週1回以上スポーツを行っている成人の割合は、4人に1人という結果で、他の地域の実施率を大きく下回っていました。

そこで、まず健全な子どもの育成を願い、小学生の多種目型スポーツ教室を開講しました。これを機に、子どもから高齢者まで多世代にわたり、「いつでも、どこでも、だれでも」気軽にスポーツが楽しめる総合型地域スポーツクラブ「こうかサスケくらぶ」を設立し、地域のコミュニティの活性化と、健康で明るいまちづくりを目指して活動してきました。現在8教室と障害者スポーツ教室を開催し、その他イベントや大会も計画しています。

2 運営委員会内のクラブ認知度の認識に温度差 →自己点検・評価導入用

随時開催される運営委員会(理事10名＋教室担当スタッフ3名)でクラブの地域における認知度が話題になり、委員の認識を集約してみると「1割台」から「7～8割は知ってもらっている」まで様々な意見が出ました。そこから、担当以外の教室の様子や会員の意識変化、クラブ運営状況等、運営委員が知らない情報の存在を課題として考えるようになりました。

3 委員全員で現状把握 行動すべき事項が浮き彫りに

各委員が意見を出し合い情報共有

自己点検・評価は年1回実施しています。各自が点検表に記入するのではなく、運営委員会の時間を30分割いて、出席した委員全員で自己点検・評価表の7つの指針について項目別に現状把握します。この過程で、委員全員が各自の意見を出し合って情報を共有していきます。毎回全員は参加出来ませんが、10年後のために今求められている行動を認識することができました。

7つの指針の自己点検・評価結果ですが、③「理念の共有」④「自発的(ボランティア)組織特性」⑤「日常生活圏」⑥「事業の多様性」の4項目の点数が2点以下となりました。今求められている行動としては、最も必要なのが③「理念の共有」で、2番目が⑥「事業の多様性」と⑤「日常生活圏」、そして3番目が④「自発的(ボランティア)組織特性」です。

7つの指針のうち運営委員会で出た意見から現状改善が必要と判断され、実際に行動を起こしたのは次の2項目です。

②「連携体制の確立」

各理事が所属している自治振興会(甲賀町内に3振興会)に積極的に働きかけようとの意見が出て、イベント等に参加・出店し「たこ焼・カキ氷・綿菓子・ポップコーン」等で活動資金を調達し始め、徐々に資金が増えています。

③「理念の共有」

クラブの思いを伝えようとの意見から、町内23区の区長にお願いし全戸に広報紙サスケを不定期ながら配布しています。

10年後を見据え実際に着手した「今すべき行動」

- ① 各教室開催の冒頭、会員の皆様にクラブ設立の趣旨を説明するとともに、法人化した思いを伝えました。
- ② まずスタッフが楽しむための「釣り教室」「遠足教室」を開講し、「ゴルフ教室」ではコンペ回数を増やしました。
- ③ 協力者の発掘(会員や知人に声をかけました)
- ④ 事実上幽霊となっている会員・スタッフの整理

幽霊会員　＝年会費納入時に保険の強制加入をお願いしました。

幽霊スタッフ＝設立当時の体育指導委員、行政職員、スポーツ振興くじ助成事業の関係で一度でも関わっていただいた有資格者の方で、過去2年間に関わりのなかった方は除外しました。

4 教室会員からの協力者が増加 クラブ役員の意識も変化

自己点検・評価を採用したことでクラブにもたらした効果と影響は以下の4項目です。

- * 幽霊会員がなくなり、4月1日現在160名の会員でコンパクトに活動ができています
- * スタッフ登録をしていない各教室会員からの協力者が増えました
- * 自治振興会や自治会から出前講座の依頼があります
- * クラブ役員も、担当ではない教室への理解が深まり、会議への出席率が向上しました

5 地域に合ったクラブを模索 若手後継者の発掘が課題

自己点検・評価を活用したことで、クラブがステップアップするために行うべき事項は認識できていますが、現状では委託事業、指定管理業務等を受ける力がないのがクラブの実態です。ただ、基礎は出来つつあり、自己財源率も95%を超えました(平成29年度末)。甲賀の地に合ったクラブを模索しながら日々試行錯誤という状況です。

また、後継者の問題もあります。設立13年目ですが、当初からのスタッフで運営している状況です。高齢化率が40%近い地域であるため、若いスタッフの発掘が悩みとなっています。

こうかサスケくらぶ クラブマネジャー 大原 克彦



こうか-すけくらぶ

クラブ プロフィール

設立年月日 平成17年 2月27日

法人化 平成25年10月15日

所在地 滋賀県甲賀市甲賀町相模

運 営 会員160名(平成30年4月1日現在) 予算規模260万円(平成29年度)

有給職員 1名

特 徴 対象人口11,000人、滋賀県南東部、鈴鹿山系の麓。甲賀忍者発祥の地。街には3小学校1中学校、ルネス学園があります。甲賀公園体育館を中心に甲賀グラウンド、テニス場、フットサル場、生涯学習館で活動しています。小中学校の体育館、グラウンドは使わなくても活動ができます。その他町内にはB&G温水プール、トレーニングルーム、野球場、夢の森広場など沢山の施設があり、町民はプール・トレーニングルーム以外は無料で使用できるため、会場に困ることはありません。

連絡先 〒520-3434 甲賀市甲賀町相模124-7(甲賀中央公園集会所内)

電話 0478-88-5900 FAX 0748-88-3119

E-Mail info@sasuke-club.jp

URL <http://www.sasuke-club.jp>



特集

他団体と連携するクラブ



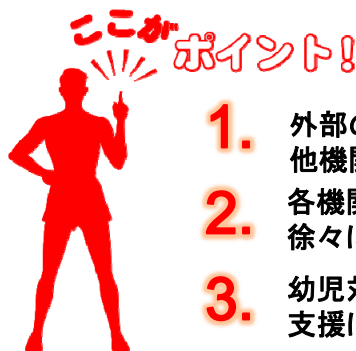
NPO法人ただみコミュニティクラブ

＜福島県南会津郡只見町＞



総合型クラブが地域に定着し、浸透するためには、地域との一体感の醸成が重要となります。そのためには、地域社会からの信頼性を確保し、地域の各種機関・団体との相互補助の関係を築くことが必要となってきます。

そこで今回は、地域の各種団体と連携し、活動を行っている総合型クラブを紹介します。



1. 外部の専門家が入る事業にクラブスタッフ全員が関わり、他機関との連携事業のあり方を学ぶ
2. 各機関の方々、保護者、地域をつなぎながら事業を進め、徐々に点が線となり面に
3. 幼児対象の事業に取り組み、未来を担う子どもたちの成長と支援に一つの方向性が示される



1 クラブ概要

クラブ設立の背景には、「マイナスイメージの強い豪雪地帯においても、楽しく雪上スポーツで地域おこしができないだろうか」という思いがありました。地域の有志（自営業・農業従事者・運送会社・公務員・団体職員等15名）で平成18年に設立準備委員会を設置し、平成20年2月に総合型地域スポーツクラブとして設立し、平成24年8月には法人格を取得しました。

クラブ理念は、広く一般地域住民を対象として、文化、スポーツ、レクリエーションを通して、スポーツの振興、地域住民の健康増進、地域のコミュニティ構築、豊かな高齢者社会の創造及び青少年の健全育成に関わる事業を展開し、健康で豊かな生活を送ることができる社会の実現に寄与することを目的としています。現在は、定期スポーツ教室の実施以外に、高齢者健康維持教室、学童期の居場所づくり連携事業、幼児の体力向上事業支援、スポーツ交流型観光推進、助成金による地域資源を生かしたスポーツの推進に力を入れて活動しています。特に少子高齢化の町が抱える地域の課題解決の一助となるよう地域のコミュニティを大切にし、健康経営の分野にも取り組みを広げています。

2 地方創生事業に参画→連携団体は県外にも拡大

過疎化が進み高齢化率が45%の只見町においては、持続可能な地域社会基盤の構築と、その担い手や支え手となる人づくりとその確保が喫緊の課題になっています。

これまでは、地域内の団体および関連団体を中心に連携し、“スポーツ振興”を通じて各種事業を行ってきましたが、平成28年度から地方創生事業のプロジェクトにメンバーとして参画する機会を得たことで、専門家による支援や事業手法を学びながら一緒に実務も担い、公共政策とまちづくりというより幅広い視点で地域のあり方を考え、その中でクラブが担っていく役割や今後の事業方針を検討するようになりました。

地方創生のプロジェクトでは、クラブのこれまでの活動実績やノウハウを生かし、地域の人づくりと地域内のつながりをつくるコア拠点・ハブとなる人材としての役割を担っています。これにより、連携する機関・団体は、地域内にとどまらず県外にも拡大しています。

「地方創生事業のプロジェクト」

【事業名】ふるさとの未来を託せる子供を育てる環境づくり事業

【概 要】

只見町では、「ひと・まち・しごと」の創生と好循環において、若い世代も含め、自らの希望に添った地方生活を応援する環境づくりを進めています。その取り組みの一環として、官民連携し、町内資源を活用し町の魅力づくりに資する子育て機能の充実強化策として、国内初のICTを活用した子どもたちの発育・発達支援事業を展開しております。また、子育て家族の交流や子育て文化の継承を兼ねた拠点としてトレーラーハウスを活用した”ママカフェ”を整備し、ふるさとの未来を託せる子供を育てる環境づくり事業に取り組んでいます。

3 幼児の体力向上を目指す連携事業

ただみ健やか発育発達支援事業～さんさんキッズプロジェクト～

【事業内容】

主として町内3保育所に通う園児3歳から5歳を対象として活動量のデータを測定

【クラブ側の事業への関わり】

- 保育士への運動あそびに関する情報伝達やOJTのサポート
- 園児自らが楽しく体を動かす運動あそびを習慣づけすることによる体力向上支援サポート
- 子育てに関わる情報を保護者に伝達し、子育て講演会や運動あそびの実践教室を支援
- 各保育所の活動量データの収集と調整

コンサルティング会社が事業受託代表 町と協力し6団体で連携

平成27年度から事業準備を開始し、平成28年度から地方創生事業「ふるさとの未来を託せる子供を育てる環境づくり」の一環として、子どもたちの生きる力を育てるための支援、それを支える周りの人・環境づくりの取り組みを行っています。事業受託代表企業であるコンサルティング会社の下、クラブを含め、全部で6つの企業・団体・研究機関がアライアンスを組み、地域づくりの総合事業の一環として、町とも協力し事業の方向性を確認しながら取り組んでいます。

データ分析で現状を可視化→年々確実な成果が生まれる

現状の可視化として、幼児期の段階から活動量、睡眠、運動能力、生活習慣の状況など様々な視点でデータを取得し分析しながら、客観的評価のフィードバックやそれに合わせて保育士・教員等の専門職、保護者、地域住民への情報提供と教育機会を持つなど複合的な支援基盤の構築を進めてきました。この取り組みは1年1年確実な成果となって現れてきており、子どもたちの体力・運動能力の変化だけにとどまらず、自ら考え主体的に動くといった行動につながり、また子どもたちの成長を支える教育関係者、保護者、地域住民へとその広がりを見せています。

財源は町と国の予算から

この事業は町の予算と国の公募型の予算を合わせて財源としています。公募申請については企画書作成のための立案や事業実施の流れや取り組み方についても外部の機関に支援していただいています。他団体と連携して事業を進める場合のクラブが担うべき(担える)役割についてもプロジェクトメンバーとして確認しながら進めています。

事業で多くの学び スタッフの質が向上し意識改革も

このプロジェクトにおいては、クラブスタッフが全員で関わっています。外部の専門家(健康経営コンサルタント・民間スポーツクラブ・SE・研究機関・総合情報サービス企業)が入って取り組むこの事業にクラブスタッフが関わることで、最新の知見や他機関との連携事業のあり方を学ぶよい教育機会ともなり、スタッフの質の向上や意識変革にもつながっています。大切にしていることは、新しいことに挑戦する気持ちを持ち続けることです。事業に主体的に取り組むことを実践していくことで多くの学びを得ています。各機関、事業に関わる方々、保護者、地域をつなぎながら事業を進めている3年目、徐々に点が線となり面となりはじめています。成果が見える嬉しさと新たに見える課題にどう取り組むかを日々考えることも、プロジェクトの一員となってみると楽しみの一つに変わってしまうから不思議です。これこそが他団体との連携で得ることができる価値ではないでしょうか。町と同じ方向性を共有しながら、企業や関係機関と連携して事業を進めるのは、クラブとしても大きな自信と実績となっています。

4 保護者の関心高まり、事業が発展

他団体との横のつながりを重視 クラブは地域のつなぎ役

クラブの役割は、事業を実施していく中においても、地域のつなぎ役であることです。各々の機関との横のつながりを大切にしながら進めていることが事業の強みとなっていますし、連携することによって得られる専門性や情報の正確性、サポート体制や多岐にわたるネットワーク、将来に向けての効果やビジョンの広がりを考えても、子どもたちの成長を支える事業として続けていくことが大切であると考えます。この事業に先駆けて、教育委員会との連携事業として学童期の放課後の居場所づくり事業『子育てひろば』を6年間実施してきたことを考えると、幼児を対象としたこの事業の取り組みは、わが町として未来を担う子どもたちの成長と子育て支援に一つの方向性が示されました。

毎年、この事業の中で子どもたちに関する生活習慣アンケート調査を保護者に実施し、この事業に対する意見や思いが自由記述欄に綴られるケースが年々増加しています。この事業に期待する保護者の関心の高さは事業の理解と協力にもつながっていますし、施策として取り組む町の子どもたちを取り巻く環境への理解が、この事業の発展に結びついていることを実感しています。

連携団体からの声「地域団体の『やる気』と『思い』が真の成果につながる」

「われわれ外部の専門家が入って支援を行うことは可能ですが、コアになる存在として欠かせないのは、やはり地元の地域団体の『やる気』と『思い』です。私たちは最初の取り組みのきっかけづくりの方向性を示し、動き出すための最初の支援は行えますが、取り組みが地域に根付き真の成果につながっていくには、そこにいる地元の方が『わがこと』として捉え、主体的に考え行動することが大事です。地域の顔の見える存在として活動してきたクラブのこれまでの実績やノウハウといった土台があってこそ、これらの事業が展開できていると感じています」

5 クラブ側の役割は事業の調整とフォローが中心

クラブとしては、初めての企業や各機関との連携事業でしたので、企画・立案から実践までのスピードの速さに驚きました。事業の進め方についても学ぶところが多く、新鮮な気持ちで取り組んでいます。事業の細かい調整やフォローに回ることが多いですが、毎年子どもたちの成長や地域の子育て意識が変わっていることを実感することが多く、この事業の意義深さを感じています。

6 永続的なまちづくりに向け、保ち続けたい「三つの目」

少子高齢化が加速する地域において、人・分野・世代・地域を超えて、「人」「モノ」「お金」「思い」が循環し、相互に支える・支えられる関係づくりが不可欠になってきます。

中でも、まちづくりの基本となる人づくりは重要であり、これを中核に据えて事業を行っているクラブの意義や役割も大きいと感じています。居心地が良く未来に続く永続的なまちづくりのあり方をともに考え取り組むメンバーの一員として、「三つの目」が大切と考えます。それは、広い視野で物事全体を見つめていく「鳥の目」と、現状をきっちりと把握し足元を見つめ直す「虫の目」、今後どのような展開になりそうなのかを予測し時代の流れや社会の変化を捉え対応を検討する「魚の目」です。一つずつ丁寧に相互支援の関係を生かしながら今後も取り組んでいきたいと思います。

(NPO法人ただみコミュニティクラブ クラブマネジャー 平山真恵美)

クラブ プロフィール

設立年月日 平成20年2月29日

所在地 福島県南会津郡只見町

運 営 会員数290名(平成30年4月現在)、予算規模2,000万円(平成30年度)

有給職員 2名

特 徴 少子高齢化の町で地域資源を活用したスポーツを通じて地域の活性化に取り組んでいます。町と連携し、多岐にわたる職種の方々、団体、各機関の協力を得ることで新たな視点も生まれチャレンジし続けることが活動の継続につながっています

連絡先 〒968-0601 福島県南会津郡只見町小林字下前田412番地

電話番号 0241-86-2671 FAX 0241-86-2587

URL <http://tadami-cc.com/>

E-Mail info@tadami.info



特集

他団体と連携するクラブ

いきいきエンジョイ清原スポーツクラブ ＜栃木県宇都宮市＞

総合型クラブが地域に定着し、浸透するためには、地域との一体感の醸成が重要となります。そのためには、地域社会からの信頼性を確保し、地域の各種機関・団体との相互補助の関係を築くことが必要となってきます。

そこで今回は、地域の各種団体と連携し、活動を行っている総合型クラブを紹介します。



1. NPO法人格取得を断念し、会費値上げでクラブ自立
2. 近隣大学との連携には大学側のキーマンが必要
クラブ側との長いつながりが契機に
3. 他の総合型クラブと地元プロスポーツチームの協力で「スポーツ祭典」が発展

1 クラブ概要

宇都宮市の2006年スポーツ振興基本計画による市内25中学校区すべてに総合型地域スポーツクラブを設立するとの決定を受け、清原中学校地区でも2008年9月清原地域スポーツクラブ設立準備委員会を結成、活動スケジュールを策定し、それに基づいて活動を進めました。2009年4月からはクラブ立ち上げへの本格的作業に移行し、クラブ名称募集により最優秀作「いきいきエンジョイ清原」が採用されました。2010年3月27日、設立総会を開催し「いきいきエンジョイ清原」はスタートしました。

当初は、バドミントン、スポンジテニス、ソフトバレーボール、バスケットボール、エアロビクス、ティーボール、3B体操、輪投げ、ペタンク、吹き矢の10種目で始まりました。1年目の会員数は210名を数え、まずまずの出だしでしたが、東日本大震災により、清原地区においても体育施設などが多大な被害を受け、しばらくの間使用が禁止された時期もありました。

2014年3月までは発足当時の会費と宇都宮市、自治会連合会からの助成金でクラブを運営していましたが、クラブの充実を図るため、totoの助成金を申請し、2016年度までの3年間助成金をいただくことができました。この期間で、用具購入やインターネットHPの作成、広告と多方面にわたりクラブを充実することができました。しかし、2017年度以降もtoto助成金を受けるにはNPO法人格を取得せねばならず、クラブ役員で検討を重ねた結果、「知恵も人材もない」、「片手間でのNPO法人運営はできない」との結論に達しました。そこで自立のため会費を値上げし、「助成金無しでも運営できる体質をつくろう」ということになりました。

2016年6月に検討を始め、同年8月に値上げに関するアンケート調査を実施した後、同年12月に臨時総会を開催。会員の皆様に値上げに至った経緯と値上げ後の会費、今後のクラブの運営について説明を行い、了承をいただくことができました。（例：大人3600円→9600円）

2017年4月からは、宇都宮市、自治会連合会の助成金と会費のみでクラブを運営していくことになりました。アンケートの結果からは会員数の激減を予想していましたが、会員の皆様の温かいご理解の下、2018年3月末現在、前年比20%減の236名にとどまり、値上げ後2年目を迎えています。役員一同、会員の皆様のクラブ継続への熱い思いを受け止めて運営に当たらなければならないと気持ちを引き締めております。

毎年種目の見直しを行い、2018年度の種目は、バドミントン、スポーツ吹き矢、スポンジテニス、フォークダンス、卓球、ソフトバレーボール、3B体操、エアロビクス、バスケットボール、カローリング、ソフトテニス、柔道、フットサル（小学6年まで）の13種目になっています。活動場所は主に清原中学校体育館、武道場、清原中央小学校体育館、清原台2丁目公民館です。これからは地域の方々の心と身体健康維持に寄り添ってまいりたいと考えております。

クラブ設立前から作新学院大と協力関係 →大学生が指導者

インターンシップで大学生受け入れ

クラブ設立前から、作新学院大学からは、講演での講師派遣依頼、各種会議、指導者選出などでご意見をいただいております。また、設立当時の茂木会長が清原体育協会の会長で、同体協が各種大会を主催する中で作新学院大学との協力関係が築かれました。設立後には、大学生が指導者として活動いただく中、インターンシップとして毎年スポーツクラブで5～6名の大学生を受け入れ、相互交流の良い機会になっています。2016年からは作新学院大学と清原地域振興協議会、いきいきエンジョイ清原SCの合同主催によるスポーツの祭典を開催するなど、スポーツを通じた地域の活性化を目的に協力態勢ができてきています。

3 5 団体合同で「清原スポーツ祭典」を開催

クラブ単独の体験教室→機運高まり合同祭典に発展

2016年11月27日に「第1回清原スポーツ祭典」を、2017年11月12日には「第2回清原スポーツ祭典(兼河内地区SCフェスタ)」を作新学院大学構内で開催しました。それ以前は、いきいきエンジョイ清原単独で、市立清原中学校体育館にてクラブで行っているスポーツ種目の体験教室という形で開催していましたが、2015年に清原地域として「スポーツ活動を高め、地域を盛り上げよう」との機運が高まり、清原地域振興協議会が主体となり作新学院大学、清原地区自治会、清原体育協会、いきいきエンジョイ清原SCの5者合同でスポーツ祭典を催すことが決まりました。

大学生が献身的な支援活動 県内プロチームの応援も

スポーツ祭典実施前に行った2016年2月のいきいきエンジョイ清原SCの体験教室には、作新学院大学、清原地域振興協議会も参加され、スポーツ祭典に向けた姿を体感していただきました。その後、清原スポーツ祭典実行委員会で活発な討議がなされ、チラシや広告による集客を図り、11月の「第1回清原スポーツ祭典」の開催にこぎ着けることができました。祭典の当日は、大学生にもお手伝いいただき、用具の準備から片付け、体験者誘導など、献身的に活動してくださいました。また、実際に学生自ら体験に加わっていただくなど、楽しい時間を共有できました。さらに、県内プロスポーツチームである栃木SC(サッカー)、宇都宮ブリッツェン(自転車)、栃木ブレックス(バスケットボール)からも応援をいただき、より充実させることができました。教室に参加した子どもたちは、どの子も笑顔で瞳を輝かせ、大きな喜びとなったのではないのでしょうか。

第2回祭典から宇都宮市内の8つの総合型クラブも参加

第2回スポーツ祭典(兼河内地区SCフェスタ)では、河内地区連絡協議会に加盟する10クラブのうち宇都宮市内8つの総合型スポーツクラブも運営に参加し、独自の展示ブースを設置して来場者にクラブの活動をPRするだけでなく、各種目への応援(用具設置・撤去、ボール拾い等の補助、体験者の誘導など)を行うなど盛り上がったイベントとなりました。

スポーツ体験種目以外にも、小学生を対象とした栃木SCによるサッカー教室や作新学院大学からのご提案で組まれた大学生によるランニング教室、ドッジボール、鬼ごっこ等のプログラムが展開され、子どもたちから歓声が上がっていました。

2018年度もこれまでのつながりを大切に、第3回開催に向けて協議を続けているところです。

※体験種目：バドミントン、スポーツ吹き矢、スポンジテニス、3B体操、エアロビクス、卓球、ソフトテニス、グラウンドゴルフ、輪投げ

4 作新学院大との教室連携は、小中学生会員と大学生にも学びの場に

バドミントン教室とソフトテニス教室で大学生が指導

先述のとおり、作新学院大学から小・中学生のバドミントン教室、ソフトテニス教室に学生指導者を受け入れてから10年近くになります。この間、当クラブとの連携で大学側の窓口役となったのが経営学部スポーツマネジメント学科の福田将史教授です。同教授の「インターンシップA」の授業では半期15回のうち5回を実技としており、当クラブでの教室指導を通して学生と小・中学生会員、相互の学びの場となっています。

また、プロサッカーチーム栃木SCの本拠地グリーンスタジアムが近隣にあり、本クラブでは栃木県の事業であるプロスポーツチーム派遣交流事業を活用し、当クラブの子ども会員向けサッカーイベントに栃木SC選手に来ていただくなどの連携事業がありました。

5 学生指導者のエネルギーが小中学生に伝わり「生きた学習」に

指導を受けた小・中学生会員にとっても、指導に当たった学生にとっても相互に有意義な活動となっているようです。学生は、活動を通して目の前の子どもたちと触れ合うことで地域に役立つ喜びを感じることができます。それによって得た学生指導者のエネルギーは、指導を受ける小中学生会員にとっても、しっかりと伝わっている様子で、そうしたエネルギー交換にも似た「相互の学び」は、単なる地域交流の域を超えて、まさに「生きた学習」となっていると言えるのではないのでしょうか。

6 帰路交通手段の関係で限定される学生指導者

スクールバスは夜8時で終了

福田教授によると、学生指導者の交通手段が課題の一つになっているということです。クラブが活動拠点としている中学校と大学は隣接しており、行き来する点では好立地です。しかし、バドミントン教室が終了するのは夜8時半過ぎで、参加する小・中学生会員は保護者の送迎ですが、学生にとっては駅へ向かう大学のスクールバス最終運行時間が夜8時までであるため、近隣に住んでいるか、自家用車等を所有していなければ交通手段がなくなってしまいます。

会員の習熟度が高く、学生指導者も高い競技レベルが必要

競技レベルの確保も課題のようです。バドミントン教室に集まる小・中学生会員は、学校での部活動後さらに練習の場を求めてやってくるため、競技レベルもある程度高くなっています。そのため、恒常的に指導者派遣をしようとする学生との競技レベルもある程度高いものが求められます。しかし、バドミントン部の学生の練習時間や各自のコンディショニング時間の確保と、クラブでの教室指導の両立は難しいのが現状です。一方、バドミントン経験者で大学部活動未加入者の中から、指導するに足る競技レベルを持つ学生を見つけることも難しい状況です。

そこで、「インターンシップA」の実技5回分を1回の集中講義とすることで大学生の負担を軽減し、競技レベルとクラブとの交流機会の両方を保ったまま、小・中学生会員と1日ゆったりと交流を持つことが可能となっています。

7 役員の世代交代、指導者と活動場所の確保が課題

今、クラブとしては、4つの課題があります。それは、「クラブ役員の世代交代」、「指導者の確保」、「活動場所の確保」、「昼時間帯に活動する際の指導者確保と会場の確保」です。

特に、クラブ役員は、クラブ発足当時からほとんど変わらず、新しい役員が入っていません。若い人達へいかにしてバトンを引き継いでいくかが課題の一つです。

また、活動場所の確保については、公民館をお借りして活動している種目もありますが、体育館を利用して昼間に活動を行うには学校では不向きです。そのあたりを解決できればと模索しています。

(いきいきエンジョイ清原スポーツクラブ 大森 満徳)

クラブ プロフィール

設立年月日 平成22年3月27日

所在地 栃木県宇都宮市清原地区

運 営 会員数236名(平成30年3月末現在)、予算規模280万円(平成29年度)

有給職員 1名

特 徴

いきいきエンジョイ清原スポーツクラブは、心の豊かさを求める交流の場と楽しみながら健康を保てる種目および、心と身体の健康を保つ安らぎのある充実した時間を提供します。また、子どもから高齢者まで気軽にスポーツ活動に参加できる環境整備を目指し、健康で活力ある地域づくりに寄与します。

連絡先 〒321-3235 栃木県宇都宮市鑑山231 宇都宮市立清原中学校体育館内

電話 028-666-6231

E-Mail kiyohara.s-c@peach.plala.or.jp



特集

クラブハウスを活用するクラブ



ふれあい佐布里スポーツクラブ ＜愛知県知多市＞



総合型クラブが事務作業等を行うための事務局スペース、会員や地域住民が自由に交流・談話できるサロンスペースを有したクラブハウス機能確保することにより、地域の誰もが自由に交流できる場を提供することはクラブにとって活動基盤となり得ます。

そこで、既にクラブハウスを活用し、地域づくりや活性化に貢献している事例を紹介します。



1. 小学校が使用していないスペースをクラブハウスに活用
2. 市と学校側の支援で借用料は不要、水道・電気料金は市が負担
3. 学校敷地内への拠点設置で学校での子どもたちの様子をうかがい知れる

1 クラブ概要

平成19年に、知多市の「スポーツ振興計画」が見直された時に「総合型地域スポーツクラブ」を設立する計画が提案されました。その基本方針の一つとして、市内の10小学校区にそれぞれ設立するというのが示されました。それを受けて、まずモデル地区を決定して進めていくことになり、佐布里地区が選ばれました。そこで、当地区では、生涯スポーツ課に勤務していた生涯スポーツ指導員（鰐部）を中心に、地区の各種団体（コミュニティ・老人クラブ・スポーツ委員会等）の役員に呼びかけ、設立準備委員会を立ち上げ、クラブ設立へ向けて動き始めました。委員会では、まず、地区の状況や住民の意識調査を行い、その調査結果を受け、「だれもが、いつでも、どこでも、いつまでも気軽に参加できるクラブを目指す」ことを「理念」とし、活動を始めました。

会員の要望や意見に耳を傾け、誰もが参加しやすい環境をつくることを目的に、開催日・種目・場所・方法等について、協議を重ねてきました。平成21年度に設立し、設立から6年目を迎えた平成26年10月には「生涯スポーツ優良団体」として、文部科学大臣から表彰を受けました。

今年度で設立から10年目を迎え、会員数も設立当時の250名程度から400名を超える人数になり、ここ数年は微増を続けています。活動種目も13種目になり、会員の様々なニーズに応える体制を整えています。日々の活動への参加状況も、1週間(4日間)を通じて、毎週延べ約300人の参加が続いています。

2 小学校の旧用務員室を無料で借用、改装・一部備品調達は自前で

当初、クラブハウスについては設立準備委員会であまり話題になりませんでした。しかし、クラブ設立の準備を進めていくうちに、用具の保管・常時活動・会議室等の観点からクラブハウスを保有することが重要であると考えられるようになりました。また、先進地区(豊田市・北名古屋市等)を見学した時に、どのクラブもクラブハウスを所有し、有効に活用されていることを知り、その必要性を痛感しました。その後、小学校体育館や公民館の会議室、個人の家等を考え検討しましたが、いずれもこれといった決め手がありませんでした。地区内を探している内に、小学校の旧用務員室が、倉庫として利用されているという情報を得ました。実際に見学に行くと、使用できなくなった机やいす、壊れた運動用具等が所狭しと置かれていました。そこで、学校と市教育委員会に借用できないかをお願いしたところ、「倉庫の中をクラブで整理すること」を条件に許可をいただきました。

倉庫の中は、以前に人が住んでいたため、風呂とトイレがあったり、細かな間仕切りがあったりで、クラブハウスとしてはやや機能性に欠けていたため、市にお願いして風呂とトイレを除去してもらうことにしました。細かい間仕切りの撤去・畳の入れ替え・下駄箱の設置等は、会員の有志にお願いしました。エアコン・冷蔵庫・時計・蛍光灯・整理棚等は、クラブで購入しました。事務机・長机・いす等は、学校からいただきました。電話については、当初置いていましたが、使用頻度が低いということで撤去しました。水道料や電気料は、市教育委員会にお願いしたところ、市の予算で賄っていただけることになりました。クラブハウスの借用料と維持経費はほとんど不要ですが、今後は、建物の老朽化に対してどう対応していくかが大きな課題であります。

3

廃屋同様のスペースを再利用→市と学校側が全面協力

こうした経緯からクラブハウスを保有するまでに苦労した点は、特にありません。市教育委員会がスポーツクラブのモデル地区として当地区に依頼した関係上、市生涯スポーツ課や学校が全面的に協力していただき、保有に関してはスムーズに事が運びました。また、廃屋同様の扱いを受けていたスペースを再利用するということで市当局の賛成も得ることができたと思います。

クラブハウスで行っている具体的な活動

- 体育館で活動する各種目の用具の保管をしています
 - ・放送設備・卓球・バドミントン・ミニテニス・ビーチボールバレー等
- 囲碁・将棋を、毎週火・木・土の午前9:00～11:30まで行っています
 - ・参加人数は、毎回10人～12人程度です
- コーヒーメーカーを活用してコーヒー募金を実施
 - ・できたコーヒーをポットに入れて各活動場所へ運び、参加者に募金制で飲んでもらっています
- 運営委員会等の会議を開いています(月1回程度)
- たより・会員名簿・会員証等の保管をしています

小学校の敷地内に拠点(クラブハウス)を置くことによる特徴・良かった点

- 体育館で活動するための用具等を保管できる
- 印刷・コピー等を学校へお願いに行ける
- 週3日間、クラブハウスで活動することにより、学校での子どもたちの様子が分かる
- 他の施設だと有料になるが、小学校内のクラブハウスではほとんど無料になる



クラブハウス入口



囲碁・将棋(クラブハウス)

4 学校内設置で地域から信頼を得る→会員増の効果も

学校の敷地内にクラブハウスが置かれていることにより、地域の人たちから「信頼できるクラブだな」と思われるようになりました。また、学校公開日や行事等で、来校された方にクラブの存在を認識していただき、実際に、保護者や孫の紹介でクラブに入会したという会員もいます。囲碁・将棋の参加者からは「暑い時や寒い時にクラブハウスで快適な活動ができる。家にいるよりは、充実した1日が過ごせる」という声も出ています。

5 発足当初はクラブ理念・活動内容の周知に苦心

設立へ向けて動き始めた時から市教育委員会・地区スポーツ委員等から様々な支援がありました。その支援をもとに、設立準備委員が自信を持って地区の諸団体(コミュニティ・老人クラブ・民生委員・町内会等)に働きかけることができました。

ただ、市の支援があり、地域団体の役員の協力もありながら、それぞれの団体の個人個人の意識を高めない限り、活動に参加してもらえない実情がありました。回覧板や市の広報でPRしても、なかなか浸透していきませんでした。そこで、各団体の行事や集会に参加して、本クラブの理念や内容をきめ細かく説明しました。特に「継続できる」「できるできないは重要なことではない」「道具はなくても参加できる」ことなど、だれでも、いつでも参加できることを話しました。また、既に参加している方には、自分の周囲の人に話してほしい旨をお願いしました。さらに、スタッフや講師の先生には「技能を高めることも大切だが、楽しく活動できることが最も大切だ」という姿勢で臨んでほしいことをお願いしました。2年目3年目を迎えるあたりから、口コミの効果やスタッフ等の努力により、会員が急増して今に至っています。

6 会員の要望受け止め、活動種目増を目指す

現在、設立から10年目を迎えて、種目数を13種目まで増やしてきました。今後も、会員からの要望や意見を真摯に受け止め、運動・文化にこだわることなく種目数を増やしていきたいと考えています。また、参加者が自宅から徒歩で行けるような場所で活動できるようなシステムやプログラムを考えていきたいと思っています。さらに、クラブの基本姿勢である「参加して楽しく活動できるスポーツクラブ」を継続して進めていきたいと考えています。

(ふれあい佐布里スポーツクラブ 事務局長 鰐部 忠夫)

クラブ プロフィール

設立年月日 平成21年4月11日

所在地 愛知県知多市佐布里地区

運 営 会員数436名(平成30年7月現在)、予算規模114万円(平成30年度)

男女比＝女性63.4% 平均年齢＝72.1歳

有給職員 15名(時給100円 1回上限300円)

特 徴 高齢者の居場所づくりを目的に、地域住民の憩いの場や触れ合いの場として活動しています。また、スポーツクラブといっても、身体的な活動(9種目)だけでなく、文化的な活動(4種目)も含めた幅広い種目を採り入れて活動しています。さらに、会員であれば、週4日(月・火・木・土)にプログラム化されている13種目のどの活動にも参加できるようにしています。

連絡先 TEL 090-1821-7906(鰐部事務局長)

URL <https://www.chita.lg.jp/docs/2014012300346/>

(知多市総合型地域スポーツクラブURL)



ペタンク(梅が丘グラウンド)



グラウンドゴルフ(にしの台2号公園)



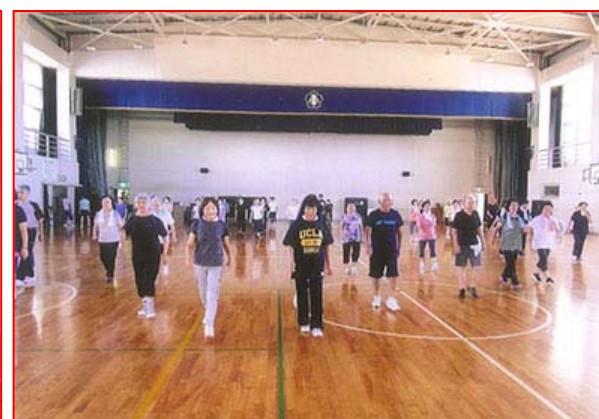
囲碁ボール(佐布里会館)



健康麻雀(佐布里会館)



卓球・囲碁ボール(佐布里ダム記念館)



健康体操(小学校体育館)



唱歌・一般スポーツ(小学校体育館)

特集

クラブハウスを活用するクラブ

NPO法人ELF丸亀 ＜香川県丸亀市＞

総合型クラブが事務作業等を行うための事務局スペース、会員や地域住民が自由に交流・談話できるサロンスペースを有したクラブハウス機能確保することにより、地域の誰もが自由に交流できる場を提供することはクラブにとって活動基盤となり得ます。

そこで、既にクラブハウスを活用し、地域づくりや活性化に貢献している事例を紹介します。



1. JA香川県農業協働組合にアピールし格安家賃のクラブハウスを確保
2. 農協跡地の効果＝地域住民にも親しみやすく、いつでも気軽に集える場所として機能
3. クラブハウス移転で地元行政や教育委員会、体育協会など各団体から信頼を得る

1 クラブ概要

クラブ設立のきっかけは、少子化による児童数減少に伴い、単一小学校区のスポーツ少年団として活動が続けるのが難しくなったことでした。隣接する城西小学校区でも同じ問題を抱えていたため、合同で練習を始めました。その後、丸亀市にも働きかけて、それまでにない校区を超えた合同チームで試合に出場するなど、サッカークラブの活動を充実させていきました。

そうした折に、現クラブ理事長が「総合型地域スポーツクラブ」のことを知り、周囲に働きかけ、スポーツと文化的活動を通して、地域で子どもを育てる環境づくりを狙いとしたクラブを設立することになりました。設立の中心となったのは、前身のサッカークラブの指導者や保護者、そして市内で理科教育に熱心に取り組む教育関係・企業関係の退職者の方々でした。行政等の支援を受けず、地域住民が中心となって立ち上げたクラブであり、設立2年目の平成15年12月にはNPO法人格を取得し、現在に至っています。

クラブ理念は、

E = Everybody みんな(子どもから高齢者までみんなが集う活動)

L = Lively 元気で(生き生きとした活動)

F = Future 未来へ(大きな夢と希望を持って発展する活動)

であり、クラブ名にもなっています。設立当初から大きな変化はありませんが、身の丈に合わせた活動を地道に続けています。現在、スタッフの最高年齢が92歳、平均年齢が70歳となっており、世代交代が課題です。

2 高額家賃がネックとなり、JA農協支店跡地にクラブハウスを移転

クラブ設立当初から、活動の拠点として、またクラブ運営維持費を確保するための教室事業を展開するにあたって、クラブハウスは絶対に必要であると考えていました。クラブ設立総会の半年後には、人脈を駆使して、丸亀市に隣接する善通寺市「kapika」にクラブハウスを置き、活動を始めました。「kapika」は、知り合いの家電店が所有する照明専門の元店舗で、軽量鉄骨2階建て駐車場完備のオシャレな建物でした。しかし、当初は会議が中心であったため、予定していた教室事業を行うことができず、月額20万円の家賃を払い続けることができませんでした。

その1年半後、現在のクラブハウスに移転し、今に至っています。現在のクラブハウスは、丸亀市立城坤小学校の隣にあるJA農協支店跡地(230坪)で、立地条件にも恵まれています。

クラブハウスについては、家賃を支払って保有することを前提に考えていたので、どのようにして格安の家賃で賃貸できるかを第一に考えました。知人の人脈をたどり、非営利活動として社会貢献活動に取り組んでいることをJA香川県農業協働組合にアピールし、現在のクラブハウスを借りることができました。

なお、クラブハウス確保の重要事項としては、「事務所として使用する」、「会議や総会ができるスペースがあり、日常は各種教室として使用する」、「駐車スペース(普通乗用車20台分)を確保できる」、「立地条件」、「少しでも安い賃料」の各項目を満たすべきと考えました。



クラブハウス





農協跡地で地域住民から親しみ 備品の保管・管理等で有効利用

JA農協支店跡地に移って良かった点は、もともと農協であったため地域住民にも親しみやすく、いつでも気軽に集える場所として機能していることです。クラブハウスにあるクラブのPCや印刷機、コピー機は自由に使用することができ、併せて各クラブ・教室で使用する備品等をクラブハウスに保管・管理できる点も、喜ばれています。

クラブハウスでは、ダンス、シニアの健康教室、各種文化教室を定期的に行っています。また、小学校の体育施設開放運営委員会の事務局として地域のスポーツ推進に貢献するとともに、J2のカマタマーレ讃岐の丸亀後援会事務所としても活用されています。その他、クラブの理事会・役員会・総会等の各種会議でも活用しています。



クラブの信頼度・知名度が向上 寄付でマイクロバスを所有

クラブ設立当時のNPO法人と言えば、民家の一部屋を事務所にしたり、公民館や学校施設の一部を間借りして運営するところが多かったと思います。その中で、元の農協支店を丸ごと借りてクラブを運営することで、当初、クラブを遠目に眺めていた地元行政や教育委員会、体育協会などから信頼を得たことは間違いありません。このことを契機に丸亀市と協働して第一回全国芝生サミットや西日本スポーツフェスティバルや全国模型飛行機大会を開催しました。

信頼を得たことにより、クラブが行うイベントに市長、教育長、市議員が来賓として出席していただけます。人が動けば、新聞報道やテレビニュースに取り上げてくれます。クラブ運営スタッフも人物紹介で何人も取り上げていただきました。クラブハウスを所有したことで、クラブに対する信頼度や知名度が向上しました。特に、活動拠点の一つである城坤小学校からの信頼度は大きく、丸亀市や丸亀市体育協会からの信頼も厚いです。さらに、クラブとしての信頼度もアップしたことで、念願だったマイクロバスをロータリークラブから寄付していただくことにもつながりました。このクラブ所有マイクロバスですが、健全な青少年活動に貸出しており、利用団体から感謝の声もいただいています。

5 建物の老朽化や雨漏り対策など修繕で苦勞

当クラブの場合、賃貸料が年間100万円ほど必要になり、それとは別に光熱費もかかります。また、賃貸契約において修繕はクラブ持ちとなるため、建物の老朽化や雨漏り対策などで苦勞しています。

6 課題は更なるクラブ活性化 災害時支援拠点も目指す

クラブの課題として、今後は以下の2点が重要と考えております。

- ①クラブハウスでの活動の更なる活性化を図り、地域住民がもっと気軽に集える場所に
していくこと
- ②地域における、災害時の支援拠点として、防災に関する整備を充実させていくこと

今後、学校部活動の新たな動きを踏まえ、クラブハウスの役割や活用方法に更なる期待が寄せられるように思われます。このようなことを含め、クラブハウスの整備に活用できる補助金等がより充実することを願っています。

(香川県クラブアドバイザー 山家 春香)

クラブ プロフィール

設立年月日 平成14年4月1日(平成15年12月に法人格取得)

所在地 香川県丸亀市城坤・城西地区

運 営 会員数194名(平成30年3月現在)、予算規模406万円(平成29年度)

有給職員 0名(全てボランティアで運営)

特 徴 「スポーツと文化を通して、子どもを育てる環境づくり」を目的に設立。定期活動として、少年・少女サッカー、ソフトテニス、ダンス、体操の運動系4種目に加え、サイエンス、そろばん暗算、書道硬筆、美術造形、韓国語の文科系5教室も実施しています。その他、「全国模型飛行機大会」を15年連続開催、「丸亀なでしこスマイルサッカー交流大会」を主幹、公益社団法人青年海外協力協会(JOCA)による南米5カ国視察団受け入れなど、多岐にわたる活動を行っています。平成24年に香川県教育文化功勞者表彰、同25年に文科省生涯スポーツ功勞団体表彰を受賞。

連絡先 〒763-0054 香川県丸亀市中津町861番地 NPO法人ELF丸亀事務局

TEL 050-8803-6737 (つながらない場合:090-6883-6546<理事長携帯>)

FAX 050-8803-6737

E-Mail elf-maru@mxi.netwave.or.jp

URL <http://elf-marugame.com/>



JOCA研修(クラブハウス)



JOICA研修(クラブハウス前)



サイエンス教室



そろばん暗算



健康教室



老人の健康体操

特集

座談会

第1世代・第2世代が考える総合型クラブの未来 ～人材確保・育成を中心に～

持続可能な総合型クラブの運営には、効果的な事業計画を企画・立案できる人材が求められ、るとともに、常に次世代の育成を念頭に新しい人材を積極的に受け入れ、世代交代を図りながらクラブ運営に取り組むことが重要です。

そこで今回は、総合型クラブの現場で活躍されている第1世代・第2世代の方々に、総合型クラブの人材確保・育成を取り巻く現状・課題を中心にお話いただきました。



【第1世代】

関口 昌和 氏（よろずや広島北 ゼネラルマネジャー/写真中央）

【第2世代】

増田 康太 氏（NPO法人 クラブしっきーず クラブマネジャー/写真左）

森田 弘美 氏（一般社団法人 N-link. 代表理事/写真右）



1 クラブに携わった経緯について

増田（敬称略） 小学校4、5年生の頃からしきず（クラブ）のクラブ会員で、それから約20年たってクラブマネジャーという立場で現在関わっています。前任のクラブマネジャーが退職されたことが、クラブマネジャーとなったきっかけではありますが、最初は熱い思いがあったわけではなく、クラブに長く関わってきたこともあり、何となくお手伝い的な感覚で始めたと記憶しています。ただ、今は、地域にとって、子どもたちにとって、クラブが必要だという思いがあり、「クラブとして未来に何を残していくか」と考えるような心境に変わっています。

森田（敬称略） クラブ設立翌年の平成24年度から関わっています。元々、スポーツ少年団でバレーボールの指導者として活動していたところ、クラブからお声掛けいただき、運営委員兼指導者としてクラブに携わるようになりました。クラブ設立当時は、教育委員会の主導でクラブが立ち上がったこともあり、運営委員の人数が多かったことから、委員間や教育委員会との調整が大変であり、本来行うべきクラブ活動も効率よく行えないような状況でした。そんなとき、クラブマネジャーが辞め、運営委員も総入れ替えとなり、結果的に私が代表となりました。私が代表になってからは、クラブの規模を縮小して、本当にクラブに携わりたい人だけを集め、地域にあった地域のためのクラブづくりを始めました。

関口（敬称略） 広島県で平成15年3月に設立した「どんぐりクラブ屋台村」が最初に関わったクラブです。今回の座談会のテーマでもある「人」という点で話すと、このクラブを作ったとき、「10年経ったら、役員を全員入れ替えよう」という話をしました。その理由は、役員が変わっていない組織は、発展していないように見えたからです。また、私が地元の人間ではないからこそ、そこまで強く言えたと思っています。地元の人間だけがクラブに関わっていると、ある意味、人間関係が既にでき上がっていることや、固定観念に囚われてしまうことが考えられ、クラブがなかなか発展していかないようなリスクもあると思います。同じように、スポーツに関わっている人間だけで運営していくのも良くないと思います。スポーツだけを中心に物事を考えてしまう可能性があるからです。当時、設立準備中に、ある方に「スポーツする人って少ないんだよ」と言われ、ドキッとしたことがあります。このような経緯もあり、理念としては、「総合型地域スポーツクラブ」ですが、クラブ名には、あえて「スポーツ」という言葉を入れず、スポーツをやらない人も関わりやすいようなクラブを目指し、スポーツ以外の様々な活動も行うこととしました。

2 人材確保のポイントとは？

増田氏 将来クラブに関わる「子どもたち」の主体性と多様性を育成する

森田氏 主婦のアンテナを活用し情報収集

関口氏 クラブ側の視点を少し変えることで人材確保の幅を広げる

増田 「クラブは、楽しいところ」という認識を持ってもらうことが必要だと思います。特に子どもの場合、将来的にクラブに帰ってきてもらうためには、前述の認識を持ってもらうことと併せて、主体性を持てるような育成が必要だと思います。今、しっくいずでは、子ども対象のプログラムで、子どもたち自らが、「こういうことをやりたい！」と考えるような仕掛けづくりをしています。子どもたちが考えたアイディアは、突拍子もなく、時間もお金も手間もかかる内容が多いです。しかし、そのアイディアを「できない」で終わらせるのではなく、「どうやったらできるのか」という投げかけをすることで、子どもたちが主体性を持ち、またより良いアイディアがでてくるようになります。このような主体性を持てるような仕掛けづくりをすることで、子どもたちの成長を長い目で追うことができるとともに、クラブの活動に自然と関わっていただけるような環境を大切にしています。

また、将来、子どもたちが、スポーツを指導できる人として帰ってくるのではなく、障がい者や認知症の方々等に対し、特別視することなく、地域には多様性があるという認識を当たり前のようになっていることが理想だと考えます。そのためにも、小学生のうちに、様々な多様性に関わる経験ができるようなアプローチが重要なのではないかと思います。

森田 地域の中で、誰か関わってくれる人がいないか、常にアンテナを張っています。その中で、最も着目しているのが主婦の方々です。主婦のネットワークは半端ないです(笑)。例えば、同じ主婦の中にアーティストの方がいるという情報を得ると、「ああこの人いいな」って感じで目をつけています。また、主婦の方々は、子どもの面や家庭の面等、様々なジャンルで地域と密接しているため、面白いアイディアをたくさん出してくれます。他にも、企画の実行にあたり、全員が大した打ち合わせもなく完璧に準備してくれるような、きめ細かさも持っています。また、主婦だとか主人がしっかりした仕事をなさっている場合、歩合制で謝金を払うことができるので、クラブの財政面においても、非常に助かります。



ただし、人材確保のために、主婦の方々、誰でもお声掛けするというわけではありません。私のクラブでは、「年配の方に優しい」、「子どもを大事にする」、「姑さんと仲が良い」この3つをクリアする人が合格です。ですので、ある意味、いい人しかいないですね。

関口 人材確保のためには、ネットワークを広げることが重要です。核となる人、1人のアンテナだけだと、どうしても物理的に優秀な人材を確保することは困難です。今は、「みんなでクラブを支える」というシステムが必要になってきていると思います。周りの人たちのネットワークを活用して、上手く機能させることで、人が人を呼び、街づくりになっていく—この街づくりという部分において総合型クラブが使命を果たしていくような

時代になるのではないのでしょうか。また、多様な社会的背景を持つ方々に目を向けるのも人材確保の幅を広げると考えています。実際に私のクラブであったのですが、私の教え子の20代の女の子が広島に帰ってきたという情報を得たので、クラブに関わらないかと打診しました。すると、彼女は「私はクラブに関係ないし、地域に興味がない」と素っ気なく言いました。私は、その時、「クラブにも、地域にも興味がない人こそ、クラブの地域課題を解決するためにはクラブに必要なのではないか」と思い、再度打診しました。結果、彼女はクラブの運営にはまり、クラブの活動にとっても貢献しました。このように、クラブ側の視点を少し変えることも、人材確保のポイントとなるのではないかと思います。



増田 関口さんがおっしゃった、「みんなでクラブを支える」という考えは、共感できます。私のクラブでは、有償かつ専任のスタッフは私だけです。他の若手のメンバー(スタッフ)は、それぞれ仕事を持っていて、アフター5や土日の時間帯にクラブに携わっています。そのため、クラブに携わる全員がクラブマネジャーとしてクラブを引っ張っていくようなやり方が、これからの時代には合っているのではないのでしょうか。

関口 人材に困っているクラブは多いですよ。次世代を担う人材がなかなかいないと思っていましたけど、お二人の話を聞くと、人材は結構いるんですね。人材に困っているクラブは、地域のネットワークが上手く機能していないことが原因だと思います。増田さんがおっしゃるように、本業があっても、できる範囲でクラブに携わっていただくことが大切ですね。また、田舎は特に、消防団、伝統芸能、地域の事業や催し物等に深く携わっている方も多いと思うので、そのような時間的制約から、クラブに携わることが難しい人もいないのでしょうか。

増田 「できる範囲で」というのと併せて、クラブの活動から仮に離れて行ったとしても、また戻ってこられるような雰囲気づくりは大切にしています。結婚や出産、転職等、クラブを離れる機会は誰にでも訪れることだと思います。そのため、「いつでも戻って来ていい」という雰囲気づくりは、ある意味、永続的な人材確保のポイントとなるかと思っています。

3 人材確保のためにクラブの魅力をどう伝えるか

森田氏 クラブの現場を見て何か感じ取ってほしい

増田氏 クラブは、その人の居場所づくりでもある

関口氏 肝心なのは個人の「出番と居場所」の確保

森田 特に、若い人にクラブに関わってもらうためには、クラブの活動を見てもらうのが一番です。クラブの活動を一緒に体験してもらい、どう感じてもらえるかが大事な部分かなと思っています。クラブが求める人材は、運営、子どもの指導、高齢者の指導等といったように様々です。指導者資格に限らず、その人の適正を見極め、その人に合った役割があれば、携わっていただくようにしています。また、資格は持っているけれど、活動する場がない人がいます。沼田町は人口約3700人の町ですが、看護婦、栄養士、保育士、役場を辞めた保健士等がかなりいらっやいます。そのため、先ほどの主婦のネットワークを使い、活動意欲がある方々を見つけ、声をかけるようにしています。地域には、意外と多くの資格保有者がいるのです。



増田 私は現在、理学療法士の資格を取得するため、専門学校に通っています。私の通う専門学校には、埼玉県外から来た関東近県や東北地方出身のクラスメイトがいます。そのクラスメイトを、しっきーずの夏のキャンプのプログラムに誘いました。そこで、川への飛び込み大会を実施したのですが、アメフトをやっていた身体の大きい学生が飛び込むと、すごい水しぶきが上がります。それを見た子どもから歓声があがると、参加したクラスメイトも嬉しい気持ちになります。県外出身の若者が、クラブのプログラムに参加することで、今までとは違った友達や顔見知りが増えていきます。そんな居場所づくりとしてもクラブの存在は貴重だなと感じています。まずは楽しいことを経験していただいて、「しっきーずに行って楽しかった」、「もう一回行きたい」というふうに思っていたく事が、一番なのかなと思います。

関口 森田さんのところに人がたくさん集まるのは、『出番』と『居場所』をつくっているからだと思います。主婦の方々は、家の中に限った『出番』と『居場所』はたくさんあると思いますが、社会に出たときの『出番』と『居場所』は、中々見つけれられないのではないのでしょうか。おそらく森田さんが、主婦の方々に対し、「あなたはこれね」、「あなたしかできないからね」と言っているのでしょう。「あなただからお願いしてる」と言って、『出番』をつくれれば、その人の『居場所』ができる。クラブに携わるみなさんの『出番』と『居場所』をつくるのが、人材確保のポイントでもあり、クラブの魅力になると思います。『出番』と『居場所』さえあれば、その人は輝きます。

森田 クラブには、保育園児から高齢者まで会員がいるので、そこで元気な大人を見せることが一つの魅力になると思います。子どもたちから「森田さんみたいな仕事したいな」と言われたことがあります。そんなとき、普通に元気な大人を見せることだけで、魅力になっているのだと感じますね。また、時々他のクラブの若い子がクラブに来て何泊かするんですが、悩み相談とか受けますね。「クラブは何でもできるところだし、これから好きなことができるよ。今辞めることはないよ。辞めるのは簡単だから、この先も是非続けて面白いこととしてごらん」なんて言ってます。悩み相談が魅力かどうかは分かりませんが、多種多様な方々と気軽に交流できるようなクラブ間同士のネットワークは、若手にとっては魅力となるのではないのでしょうか。



関口 現実的には、人材確保のためには、財源の確保が必要だと思います。会費は安定財源です。しっかりとしたプログラムを行い、それに見合った対価をもらうという基本的方針が、これからはもっと必要になってくると思います。少子高齢化等の影響により、行政も財源が減ってくことで、意図した事業ができなくなることが考えられます。財源の確保と併せて、最近のクラブは、地方の規模の小さいクラブと、人材を多く必要とするような規模の大きいクラブという二極化の傾向になっているのではないかと思います。どちらを選択するかというわけではありませんが、クラブの方向性はしっかりと定める必要があります。中途半端に色々な事業に手を出してしまうと、クラブの規模を大きくしたいのか、現状維持か等、方向性がぶれてしまうと思います。そのような状況だと、どういう人材を求めているのかも分からなくなってしまいます。クラブのミッションとビジョンをしっかり持つことが何より大事だと思います。

4 クラブが必要とする人物像とは

森田氏 資格よりも人柄・性格が大事

増田氏 分け隔てなく愛情を注げる人

関口氏 真面目で嘘をつかない人

適切な人材教育ができる人こそクラブマネジャー

森田 資格が有るか無いかは、クラブの会員からそこまで求められていません。知識・技術がある方が間違いなくありがたいのですが、コミュニケーション能力が低ければ、参加者の満足度は低くなります。たとえ、資格が無くても明るく元気で、参加者を大事にする人の方がいいですね。参加者は、楽しい場所、魅力的な人に集まると思います。

増田 クラブ代表でもある母には、「全ての人に分け隔てなく愛情を持って接する。そこを大切にしたいよね」と、よく話し合います。私は、多様な方々を受け入れる、いわゆる差別をしないことにすごく時間を割いてきました。日常的な業務に追われている中で一番大切なのは、クラブに来て目の前の人にちゃんと時間をかけること、尽くすことなのではないかと思っています。それができているのは、自分が日常的にいろんな人たちから愛情を受けているからです。だからこそ自分も変わることができました。分け隔てなく愛情を注げる人。そんな人を求めますね。

関口 真面目で嘘をつかない人ですね。魅力的な指導者に人が来るという話がありましたが、魅力のある指導者は、自分に魅力があると思ってしまいがちです。民間企業だったら、自分の魅力をどんどん出して「私についてきて。私が一番。」という意識で良いと思うのですが、クラブでは違うと思います。一番大事にしなければならないのは、会員さんです。会員のみなさんに対して、誰がやっても同じような指導をしなければいけないと思うのです。



指導者に対してそのような意識付けを教育するのが、クラブマネジャーだと思います。また、「私がいるからこのクラブは大丈夫」であったり、「私がいるからこれができるんだ」というような意識の指導者やクラブマネジャーは、求めないですね。

増田氏 クラブマネジャーの仕事は、人の流れをマネジメントすること

森田氏 頼りになる大先輩との関わりを大切に

関口氏 人材の固定化は、クラブの存続に関わってくる

増田 今は、20代の私がクラブマネジャーとして中心となっておりますが、これから若手がクラブに携わってきたときに、若手の考えやアイディアを参加者やクラブメンバーが否定しないような雰囲気づくりを大切にしています。前述した子どもの主体性の育成と同様に、トライ＆エラーのように、とりあえず、やってみよう！という雰囲気づくりが大切なのかなと思います。クラブマネジャーの役割というと、クラブ運営に必要な財源確保や事業計画作成等が中心として考えられていると思いますが、本来クラブマネジャーがやることは、人のマネジメントであり、人の流れをきちんとつくっていくことではないでしょうか。

森田 SC北海道ネット(北海道の総合型地域スポーツクラブ連絡協議会)は大変ありがたい場です。第1世代の先輩たちが意見を言ってくれたり、クラブの事例を発表する機会もあり、自身のクラブを見つめなおす場にもなっています。SC北海道ネットには、第1世代、第2世代、クラブアドバイザー、大学生等、色々な方々が集まります。その中で、様々な意見をいただくことで、融合のポイントを探っています。

関口 第1世代の方々の中には、役職=名誉職という意識を持つ方もいると思います。特に、スポーツの性質上、名誉職という意識に陥りやすい。そのような方が、ずっとクラブに居続けると、クラブは発展しないと思います。結果的に、人的・財政面での課題が露呈し、クラブ運営が滞ってしまい、クラブの核となる事業すらもなくなってしまう事態となります。そのような事態になる前に、前述した『出番』と『居場所』を、クラブ内で整理することが大切だと思います。



6

クラブに携わっている 第1世代、第2世代に伝えたいこと

関口氏 第2世代は、新しいことにチャレンジしてほしい

増田氏 第1世代の経験を伝承した上で新陳代謝を

森田氏 第1世代の知識を生かしつつ地域を育てたい

関口 私も当時は、第1世代の方々に好きにやりなさいと言われました。40代前半に広島県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会の代表委員にもなりました。周りの先輩方が「若い人を出さなきゃだめだね」ということで選任されましたが、やはり第1世代の方々が、第2世代の考えや行動を尊重することが大切ですね。私は第2世代かもしれませんが(笑)、ぜひ若手の方々に、どんどん新しいことをやってほしいですね。

増田 今までいた第1世代の方々がクラブを去っていく中で、若い人がどんどん入ってくれば世代交代かということ、そうではないと思います。戦後の復興をしてきた第1世代の方々の人生の経験とかノウハウを、第2世代の若手がしっかりと伝承した上で世代交代する必要があると思います。

森田 地域を大事にしないとイケないなと思います。地域のことを知らない人は、地域をうまく回せません。地域愛の強い人が結局クラブに携わっていると思います。その方々のネットワークを生かし、地域には人材が溢れていることを、しっかり理解した上で、地域を育てていけたらなと思っています。



増田 康太氏

小・中学校時代をクラブ子ども会員として過ごし、成人後、地元の志木に戻る。現在はクラブマネージャーとして、“かつての子ども会員”や同級生に積極的な声かけをし、クラブの企画・運営に若い世代が関わりはじめている。将来は、「クラブマネージャー×理学療法士＝パラレルキャリア」の確立を目標としており、専門学校(理学療法学科・夜間課程)に通いながら、『スポーツと福祉の融合』をテーマに、日々活動している。

関口 昌和氏

平成3年日本体育大学卒業後一般企業に就職。その後広島県旧豊平中学校で保健体育教員として赴任。平成8年旧豊平町教育委員会体育主事となり、平成12年総合型地域スポーツクラブと出会い、4つの総合型地域スポーツクラブ設立に係る。広島経済大学、広島市立大学の非常勤講師として総合型地域スポーツクラブとは何かを学生にも伝えている。

森田 弘美氏

小学生からバレーボールを始め、高校卒業後は東北パイオニアで実業団選手として活動。引退後、地元に戻り、総合型地域スポーツクラブに携わるようになる。クラブ運営にあたっては、地元の人を大切にしながら、地域の人と人をつなぐ安心できるクラブ運営とともに、子どもたちがたくさんの経験を通し、地元に戻ってきたくなるようなクラブを目指している。

特集

指導者育成に取り組むクラブ



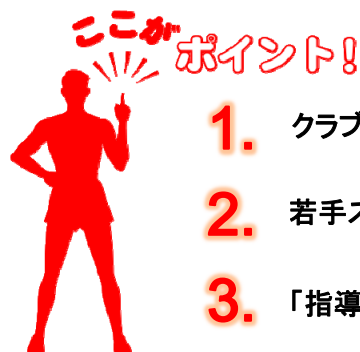
とまこまい・あそび塾

<北海道苫小牧市>



持続的なクラブ活動を行うためには、常に次世代の育成を念頭に、世代交代を図りながらクラブ運営に取り組むことが重要です。

そこで、指導者育成に取り組み、円滑な世代交代を行う基盤を整備している事例を紹介します。



1. クラブGMがLPT(リーダープロジェクトチーム)制度の導入を発案
2. 若手スタッフが積極的に教職課程を履修し、学校現場を理解
3. 「指導者の育成」だけでなく、企業と連携して「指導者の確保」にも着手



東日本復興応援リレー

1 クラブ概要

苫小牧東部地区には、多くの少年団・スポーツクラブ(組織に所属していない)が長く活動を続けていました。苫小牧東部工業地帯が隣接したことにより、市内の人口が西の方から沼ノ端地区へ移動し、地域の環境が多様化しました。宅地造成が行われ、若い従業員も多く、子どもが増えたことで、沼ノ端地区の学校数も増えました(小学校1校→4校、中学校1校→3校)。こうした人口増加など環境の変化から、単一少年団の活動では越えられない活動場所の確保、団員の取り合い、会費設定などの共通した問題が多くなりました。

平成12年に校区内の小・中学校、町内会の協力をいただき、地区の少年団が軸となり、スポーツ・文化活動を通じて、地域の発展と青少年の健全育成を目的として「沼ノ端地区少年少女スポーツクラブ連絡会」(以下、「クラブ連絡会」)を設立しました。当初、5種目5団体でしたが、その後、9種目13団体となり、平成20年度には、文部科学省の育成指定クラブ委託事業「創設支援クラブ」の指定を受け、平成22年4月より「自立支援クラブ」として活動を拡大しました。

平成20年2月20日に「とまこまい・あそび塾」が設立され、現在は陸上、野球、サッカーなどの少年団・クラブチームの他、タグラグビー、キンボール、スポレック、日本舞踊などのサークル活動が盛んに行われています。

2 LPT制度を導入し、「指導者の確保」へ始動

「クラブ連絡会」設立に尽力された島崎鶴松氏(現とまこまい・あそび塾GM)は地元で建設業を営み、長年にわたり地区の小学校のグラウンド整備を行うなど、地域や学校に積極的に関わっていました。「クラブ連絡会」では、陸上少年団の指導にあたり、全国規模の大会に出場する選手を多く輩出してきました。しかし、当時から「クラブ連絡会」に所属する団体の共通の課題として、「指導者の確保」が挙げられていました。

・以前は保護者が指導者→指導者交代のたびに指導内容が変わる弊害も

ほとんどの少年団・クラブチームでは、選手の保護者が指導者となることが多く、子どもの卒業とともに2、3年で指導者が入れ替わってしまいました。また、指導者が代わることで指導の質も変わり、子どもたちにとってもマイナスと感ずることもありました。この課題は、「総合型クラブ」へと移行するまで解決されることはなく、島崎氏は新しく設立するクラブの大きな柱として、LPT(リーダープロジェクトチーム)制度の導入を掲げました。



小学校体育授業講師派遣風景

3 若手スタッフが積極的に教職課程を履修

- ・競技知識以外に、学校の仕組みや先生の想い、児童心理学等を学ぶ
→「指導者の育成」

LPT制度の大きな目的は「指導者の育成」です。

もともと地域と密接に関わりのあったこともあり、クラブに対し、学校体育支援や中学校部活動外部指導者としての役割も求められるようになりました。学校現場で活動を進めるなか、島崎氏は「子どもたちと接する指導者は、競技のことだけではなく、学校の仕組みや先生方の想い、児童心理学などを学んだ上で、その成長に関わらなければならない」と強く感じたそうです。そうして、これから長く指導に関わるであろう若手スタッフに、教職課程の履修を奨め、クラブの研修費からその受講料を捻出しました。4年制大学を卒業していたスタッフは、2年間の履修期間を通して、学校教育における様々な知識を習得し、その学びを生かしながら現在も陸上を中心としたクラブ事業に関わっています。

4 子どもとの接し方が好転 →個々に合った指導・声がけ→指導に自信も

教職課程を履修したスタッフの、子どもに対する接し方には明らかに変化があったそうです。一人一人を見る目が変わり、以前にも増して、個々に合った指導、声がけができるようになりました。「本人も自信を持って指導にあたっているのが見て分かる」と島崎GMは話します。

また、体育支援で関わっている学校の校長先生からは、子どもや教職員に対する気配りができて、大変助かっていると好評を得ているようです。



ウィンター・サマースクール光景

5 「指導者の確保」に向け企業と提携

・企業の運動指導経験者が短時間クラブで指導

LPT制度のもう一つの目的には「指導者の確保」が挙げられます。子どもたちが少年団やクラブで活動する時間帯に2～3時間だけでも指導に携わってもらえるスタッフを確保するため、運動指導経験のある人材が籍を置く企業との提携を考えています。企業には指導で抜ける2～3時間も勤務と認めてもらい、その間の指導謝金をクラブが企業に支払うという仕組みです。

・提携企業数の増加、複数の常勤スタッフ確保を目指す

この提携は、先に挙げた教職課程を履修したスタッフが勤務する企業とクラブとの間で既に取り組まれており、今後はその数を増やして、安定的に指導者を確保できるようにしていきたいと考えています。

そしてゆくゆくは、教職課程を履修したスタッフが増え、指導の質が上がることでクラブの質も上がり、複数人の常勤スタッフを確保できるようなクラブ経営を目指しています。

6 他クラブへのアドバイス（島崎GMから）

・失敗は次へのステップ 萎縮せずチャレンジを

僕の辞書に失敗という文字はありません。チャレンジャー精神で何事にも全力を尽くし、そこで失敗と思うようなことも、それを次に生かせば、それは失敗にはなりません。クラブ運営ではP・D・C・Aサイクルが重要だと言われますが、人材育成でもそれは同じ。きちんと計画を立て実行して、検証した結果、失敗と思うことも、次に生かせばOK！—という気持ちで、若手スタッフにいろんな挑戦をさせます。がんじがらめでは萎縮して育ちません。それを見守る私自身も、チャレンジャーであり続けたいと思います。

（北海道体育協会 クラブアドバイザー 熊耳 雅美）

クラブ プロフィール

設立年月日 平成20年2月20日（平成27年一般社団法人認可）

所在地 北海道苫小牧市沼ノ端地区

運 営 会員数約370名（平成30年12月現在）、予算規模11,482,363円（平成29年度）

有給職員 1名

特 徴 主に6つの少年団・クラブ、7つのサークルが定期活動を実施しています。
年に数回、子どもから大人まで多くの方々が参加するイベントを実施し、
みんなで楽しく汗を流しています。

連絡先 一般社団法人とまこまい・あそび塾事務局
〒059-1305 苫小牧市沼ノ端中央1-1-24
TEL 0144-55-0940 FAX 0144-55-1818
URL <http://www.toma-asobijyuku.com>



地域環境美化推進活動



野球少年団へのかけっこ教室風景

特集

指導者育成に取り組むクラブ

やっしろ総合型クラブ「リ・ボンズ」 ＜熊本県八代市＞

持続的なクラブ活動を行うためには、常に次世代の育成を念頭に、世代交代を図りながらクラブ運営に取り組むことが重要です。

そこで、指導者育成に取り組み、円滑な世代交代を行う基盤を整備している事例を紹介します。



1. 熊本県体育協会の講師派遣事業を活用し、各種教室を実施
2. スタッフ不足のため近隣の高校にボランティアスタッフ派遣を依頼
3. 資格取得に向けスタッフが養成講習会を毎年受講し、人材を育成



1 クラブ概要

設立背景

クラブの会長を務める村上久栄氏は、もともと個人として、地域でスポーツ教室、ヨガ・ピラティス教室、ウォーキングイベント、講習会などでボランティア活動をやっておりました。

村上会長が新潟県レクリエーション協会専務理事の渡辺耕司先生を招いて講習会を開催した際、ひかわスポーツクラブの齋藤久允クラブマネージャーと出会い、「総合型地域スポーツクラブを立ち上げるといいのではないか」との話があり、その後、熊本県体育協会（以下「県体協」という。）に相談したのが設立のきっかけとなりました。

設立時のキーパーソン

村上久栄、小林一美、齋藤久允の3氏

クラブ理念

「未来につなげる笑顔・元気・健康、そして夢を！」

- 住民の交流を深め、明るく活力あるまちづくり
- 子ども達の健全育成、居場所づくり
- 青年の夢と活躍場所づくり
- 高齢者の健康寿命増進、生きがいづくり

現在までの経緯

設立準備委員として設立に携わったスタッフと、週1回のスポーツ教室を開催。大人から子どもまで一緒にできる内容で会員を確保しながら、年に1～2回の単発イベントとしてウオーキング大会や講習会などを実施してきました。また、県体協が実施している講師派遣事業を活用するなどして、会員確保に努めてきました。

講師派遣事業を実際に活用した教室ですが、平成28年度に中高年向けの健康卓球教室（ラージボール卓球教室）を実施し、29年度には幼児から一般までを対象としたバドミントン教室、30年度は子どもから高齢者対象のフラダンス教室を実施しました。

現在の活動状況

- 子どものスポーツ教室
- 健康卓球教室
- ヨガ・ピラティス教室
- 高齢者の体操教室
- バドミントン教室
- ミニバレーボール教室
- トランポリン教室
- 絵手紙教室
- 生け花教室
- 単発イベント（ウオーキング大会等）



2 指導者育成に向けた動き

経緯

スタッフ全員それぞれ仕事をしているため、スタッフ不足で運営に支障をきたしていた。

目的

クラブの理念でもある、青年の夢と活躍場所づくり。

具体的な取り込み

近隣の高校にボランティアスタッフの依頼。

中高年の教室の参加者に協力依頼。

行事開催前に事前打ち合わせや役割分担の確認、必要に応じて練習などを行った。

キーパーソン

運営スタッフ全員（自分ができる所で、各自それぞれの役割を担当している）。

課題

学校等でボランティアを養成することが慣例化されていないため、開催日時によってはボランティアスタッフを確保できないこともある。また、役割分担や内容を明確に伝えないとボランティアスタッフが活躍できない。

3 指導者育成への取り組み内容

取り組み内容

- イベント開催前日にボランティアスタッフに集合してもらい、運営スタッフとともに、事前打ち合わせ（業務内容、役割分担等）を行い、高齢者の教室の中では練習や打ち合わせ等を実施しました。
- 運営スタッフやボランティアスタッフの打ち合わせ日時の調整とボランティアスタッフの役割の配分については苦労しました。
- 事前打ち合わせができていたので、それぞれのスタッフが各自の持ち場で活躍してくれました。またボランティアスタッフの中には1回だけではなく、別のイベントにも協力してもらえました。

高校生ボランティアの依頼

- ウォーキングやイベント開催にあたり、活動内容をスタッフ間で話し合う。
- 高校生ができることを検討する。
- 学校にボランティア派遣の確認と依頼。
- ボランティアスタッフの活動内容の事前打ち合わせをして当日を迎えている。

アシスタントマネジャー資格取得の取り組み

- 講習会の情報の提供を行っている。
- 講習会に参加した人から感想を会議の際に話してもらう。
- 講習は2日間あるが、どうしても1日しか参加できない方については県体協に相談し、受講させてもらったことがある。結果的に翌年度再度受講し、資格取得につながった。

4 スタッフの意識が高まり、責任感も生まれる

クラブスタッフ・指導者への効果や影響ですが、責任感と取り組む意識が高くなったことが挙げられます。そのため、研修会や講習会への参加やクラブ運営面でも積極的になり、スタッフ間の連携が強くなりました。スタッフのスキルも上がり、指導者として徐々に活動ができ始めています。また、クラブ会員にも率先して協力してもらえるようになっています。イベントに参加するだけでなく、協力することで、毎年のイベントを予定に入れてもらっています。業務内容に慣れてくれたことで、運営がよりスムーズになり、助かっています。さらに、顔なじみが増えることによって笑顔も増えて会話が弾み、仲間意識が強くなりました。



5

固定した教室運営に向け、課題は安定収益と常任スタッフ確保

指導者を育成する上での課題ですが、仕事をしながら可能なときに来てもらっているスタッフが多いため、定期的な教室運営が難しいことです。今後は安定した収益を目指し、常任スタッフを確保することで、さらに魅力のある活動をしていきたいと考えています。

「やりがい」がスタッフに生じれば、一体感のある組織に変化

クラブ理念に基づき、スタッフと共に創り上げていくことで、大変な中でもやりがいや楽しみが生まれ、一体感のある組織となってきています。焦らずゆっくりと、できそうなところを見つけて、声をかけ続けていくことで、協力してもらえるようになっていくと思います。

（熊本県体育協会 クラブアドバイザー 太田黒 尚子）

クラブ プロフィール

設立年月日 平成29年2月5日

所在地 熊本県八代市高田校区

運 営 会員数88名（平成30年3月末現在）、予算規模274,000円（平成30年度）

有給職員 0名

特 徴

- ・公認アシスタントマネジャー資格を取るため毎年スタッフが養成講習会を受講し、人材を育成している。その他様々な研修にみんなで参加している。
- ・ウォーキングイベントを毎年行っており、地元高校生にも協力いただいている。
- ・指導者に有資格者が多く、専門的な指導ができる。
- ・支援学校の教員も役員の一員であるため、障害がある方へのケアができる。
- ・老若男女誰でも参加できるプログラムがあるため、交流ができる。

連絡先 〒866-0063 熊本県八代市豊原上町3265-3
TEL 090-9584-6652 FAX 0965-31-8218
E-Mail hisae123456789@yahoo.co.jp